

令和3年度の北海道地区スモン検診結果

新野 正明 (国立病院機構北海道医療センター臨床研究部)
矢部 一郎 (北海道大学医学研究院神経内科学)
濱田 晋輔 (北祐会神経内科病院)
津坂 和文 (釧路労災病院神経内科)
川島 淳 (さっぽろ神経内科病院)
丸尾 泰則 (亀田病院)
松本 昭久 (溪仁会定山溪病院)
高橋 光彦 (日本医療大学保健医療学部)
千葉 修 (北海道保健福祉部健康安全局地域保健課)
橋本 修二 (藤田医科大学衛生学講座)

研究要旨

令和3年度検診開始時点での北海道内のスモン患者は45名であった。今年度も、COVID-19パンデミックの影響により、検診はかなり制限を受けることとなり、特に集団検診は1か所も開くことができなかった。結果、検診を施行できたのは17名(女性のみ)(昨年度:17名)にとどまった。一方、このような状況ではあったが、公益財団法人北海道スモン基金の協力を得て、15名のADL及び介護に関する現状調査を施行することが出来た。スモン患者はもともとADLがよくない方が多く、さらに高齢化してきているため、新型コロナウイルス感染による重症化リスクは非常に高いと考えられる。このような環境下での検診の意義、スモン患者の状況の把握を今後も検討していきたい。

A. 研究目的

令和3年度の北海道地区スモン検診を行い、その結果から、北海道のスモン患者の現況を明らかにする。また、これまでの結果との比較を行うことで、スモン患者の状況の推移を把握し、さらに、病院・集団検診群と訪問検診群とで検診結果の比較することで訪問検診の意義も確認する。一方、新型コロナウイルス感染が蔓延している状況下での、検診の意義も検討する。

B. 研究方法

令和3年度も昨年度同様、COVID-19パンデミック前の検診と同じように行うことは困難であった。今年度も、研究班員または研究協力者が常勤あるいは非常勤で勤務している病院での検診を中心に、一部は訪問

での検診を行った(図1)。一方、検診を行えなかつ

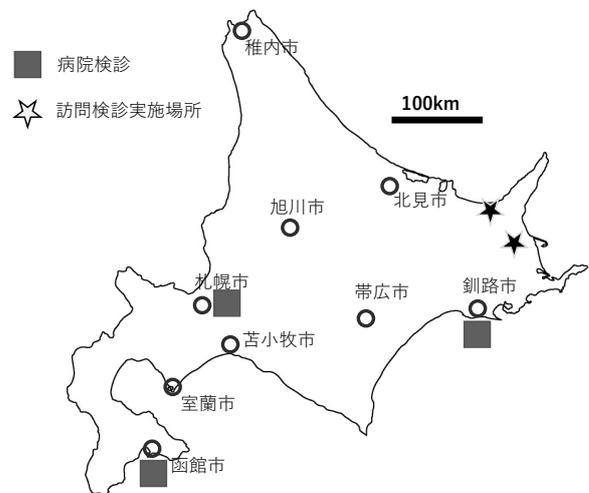


図1 令和3年度 北海道地区スモン検診地域

た患者の一部において、公益財団法人北海道スモン基金の協力により、ADL 及び介護に関する現状調査を電話で施行していただいた。昨年度同様、一昨年度までの検診データとの経時的な単純な比較は難しいが、どのような傾向があるかを検討した。

(倫理面への配慮)

本研究は、当院の倫理審査委員会の承認後に行った。データに関しては、患者ないし代諾者から署名ないし口頭で同意を得たもののみ使用した。

C. 研究結果

令和3年度の患者数は45名で、昨年度より5名減少した。今年度もCOVID-19パンデミックの影響により、結局、対面で施行できたのは17名(女性のみ17名)(昨年度:17名)にとどまった(全患者数の38%) (図2)。一方、このような状況ではあったが、公益財団法人北海道スモン基金の協力を得て、15名のADL、及び介護に関する現状調査のみ施行出来た。

検診が行えた17名の検診内訳は、病院受診検診が13名、訪問検診は4名のみで、集団検診は一カ所も

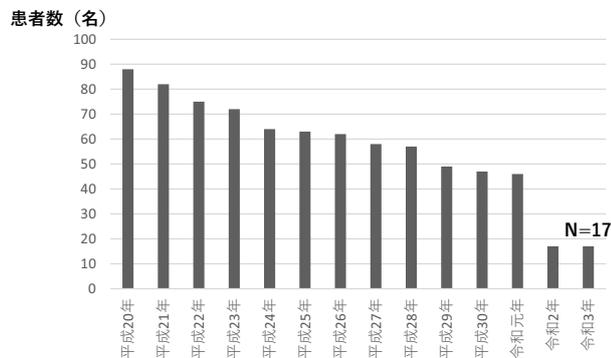


図2 検診患者数の推移

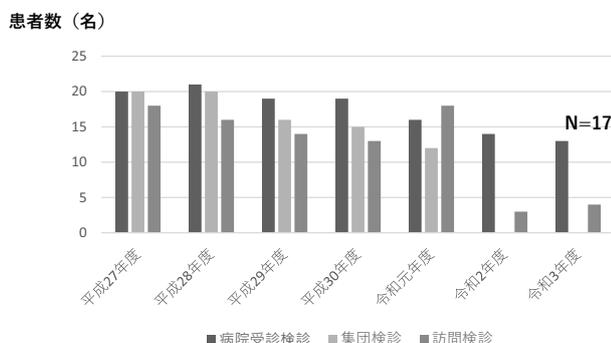


図3 病院受診検診・集団検診・訪問検診数の推移

開くことが出来なかった (図3)。17名の年齢構成は64歳以下が1名、65-74歳が3名、75-84歳が7名、85歳-94歳が6名で、今年度も95歳以上の方はいなかった (図4)。検診を受けた患者の年齢構成は昨年度と同じであった (図5)。

歩行状態については、不能・車椅子がともに7(41.2%) (昨年度8名:47.1%)、要介助が1名(5.9%) (昨年度1名:5.9%)、つかまり歩きは1名(5.9%) (昨年度1名:5.9%)、一本杖が6名(35.3%) (昨年度5名:29.4%) と、昨年度と同様の結果であった (図6)。Barthel Index については、検診した方に

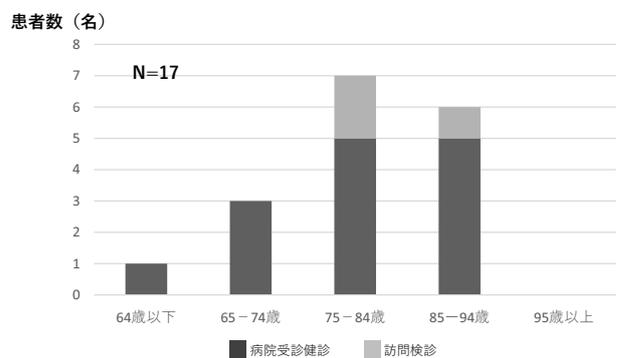


図4 令和3年度の年齢別の検診者数

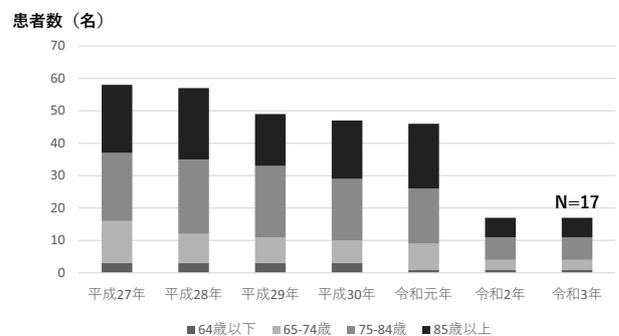


図5 年齢別の検診者数の推移

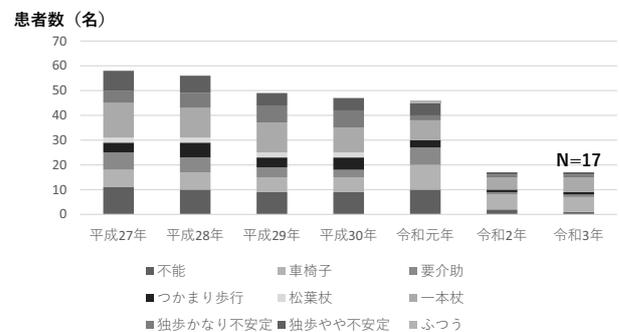


図6 歩行障害の推移

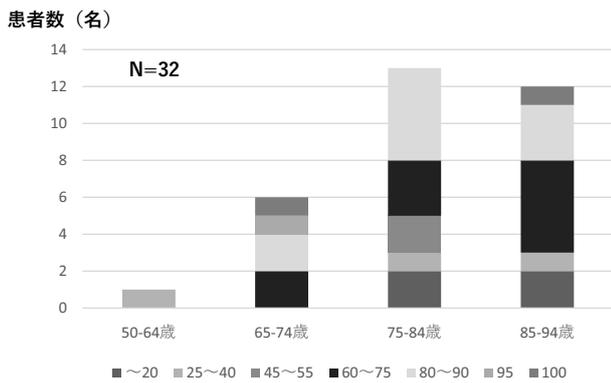


図7 Barthel Index

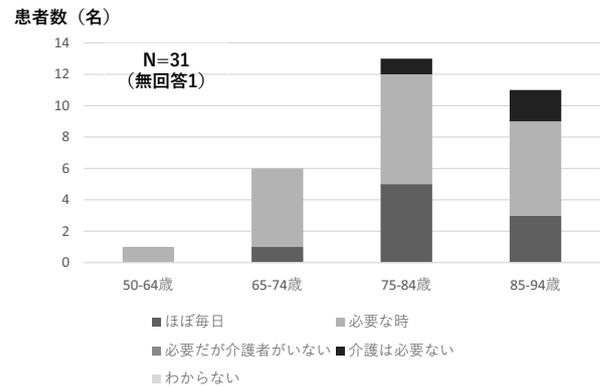


図10 日常生活での介護が必要かどうか？

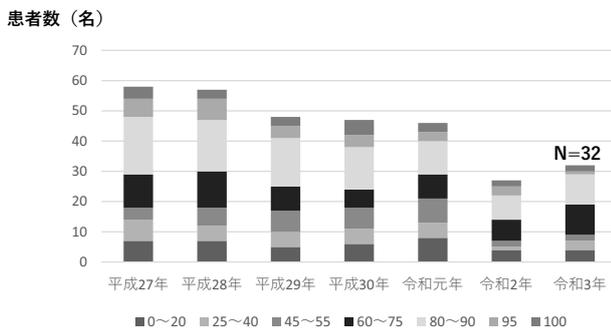


図8 Barthel Index の推移

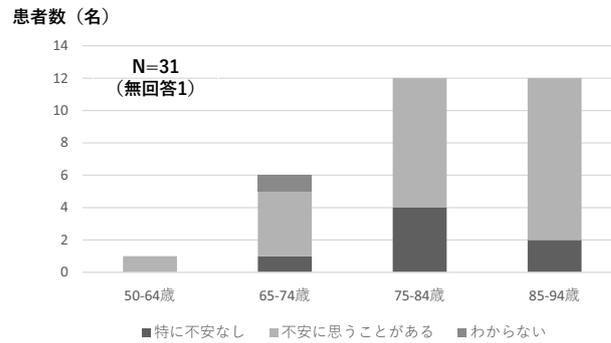


図11 今および今後の介護に関する不安

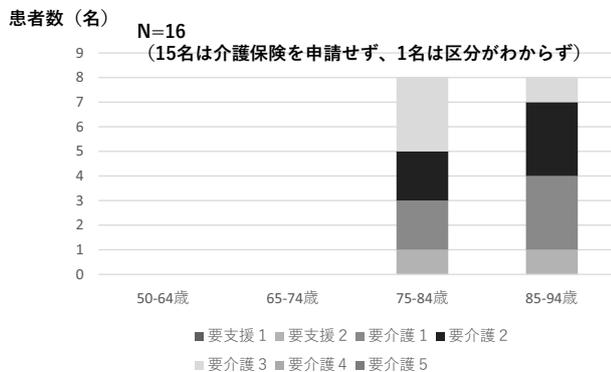


図9 介護保険申請者の認定区分

加え聞き取り調査のみの方のデータも集計でき、計32名の解析となった。20点以下が4名(12.5%)、25~40点が3名(9.4%)、45~55点が2名(6.3%)、60~75点が10名(31.3%)、80~90点が10名(31.3%)、95点が1名(3.1%)、100点が2名(6.3%)であった(図7)。Barthel Indexを集計できた数が異なるため、これまでのデータと単純な比較は出来ないが、今年度はBarthel Indexが60点以上の方がやや多い傾向があっ

た(図8)。介護保険申請者の認定区分としては、得られた数が少ないものの、要支援2から要介護3までの範囲であった(図9)。日常生活での介護が必要かどうかに関しては、大多数の患者においてほぼ毎日、ないし毎日ではないにしてもかなり必要という状態という結果であった(図10)。このような状況を反映してか、現在および今後の介護に関して不安に思う方が多いという結果であった(図11)。

D. 考察

北海道では昭和56年度からスモン検診が開始され、公益財団法人北海道スモン基金の全面的な協力により高い検診率を維持してきた。北海道では広域に患者が点在しているものの、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、検診が十分に実施できない状況が続いており、特に地方在住者の検診がほとんど施行できていない。コロナ終息後は、この間調査が不十分だった患者の状況把握が大事だと思われる。

今年度のデータに関しては、昨年度との比較はしや

すいが、それ以前の検診データとの比較が難しい。病院健診と一部訪問検診のみのデータとなるため、重度の障害のある方のデータが漏れてしまっている。コロナ終息後、検診が十分に行える状況でのデータ比較が、今後大事だと思われる。

これまでスモン基金の協力でスムーズに検診が行え、それも含め基金の活動に支えられた患者が多く存在した。スモン基金は今年度でその活動を終える予定である。これまでの検診に対する多大なご協力に感謝したい。当研究班北海道地区では、検診業務を通じて少しでもスモン患者の状況把握とサポートに今後も寄与していきたいと考えている。

E. 結論

令和3年度も、新型コロナウイルス感染症の影響により、検診が十分に行えなかった。スモン患者は年々高齢化しており、ADLの低下も認められていることから、コロナ禍はさらなるADLの低下を引き起こす可能性がある。新型コロナウイルス感染症の早期終息を願いつつ、検診を通じてのスモン患者のサポートも行っていきたい。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

なし